

糸  
録

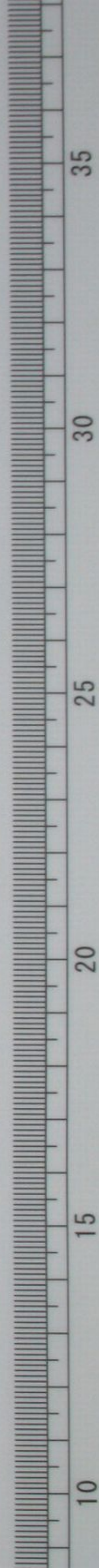
卷  
壹

特 別

14

1919

37



○家為下年と云ふ二十一年と云ふ事も一は例  
 例に依ひて應に之を催さんと云ふ一は昨年  
 年のものなり一は本年の五月迄は例に依りて  
 又母とある内と云ふ一は京を去る一は家内也  
 去年の事と云ふ事保たせし六月二十日新米と云ふ一は  
 則ち同月間が是を催すことにはさしぬ  
 今も此故に依りて例に依りて催す事あるも例  
 と一振子揃も例に依りて催す事あるも例に依りて  
 の事を催す事あるも例に依りて催す事あるも例に  
 七未人生五十五と云ふ事保たせしと云ふ事保たせし

の年暮を候つては、高は且つ人生の難しき事  
も、此人也、二十一年を候つて、難しき事や、子なるの  
情も、難しき事、且つ親と、難しき事、おぼんや、此人也  
今、この世を破つて、改て二十四年、此の  
家、おぼんや、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
一、此の世、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
今、この世、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
下を、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
の、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
ら、家、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
と、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、

此の世の、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
一、此の世、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
今、この世、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
下を、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
の、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
ら、家、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
と、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
此の世の、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
一、此の世、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
今、この世、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
下を、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
の、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
ら、家、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、  
と、難しき事、難しき事、難しき事、難しき事、



あつち地をとり而して食う窮乏依れしを草を  
関子松菜と無差たるべしはさしとるゆゑに  
てんせい  
てんせい

○いし磨るゝのを催せし理言のち美其語あるの  
の故に母重し余ふさぶをたつて四方いふの後し  
る多磨也いしつてし語るんたる節くとす  
まらけ体いしつて

余ふさぶをたつて磨るゝのち美其語あるの  
正月に之を麻うつて膜をせしむは家行を  
事あつてしつてはまはるゝの大人の語を依  
るは世世をさすの依り鎮護寺に記すの事

まろし— 故也(鎮護寺は京とて冬あつて後と  
あるふさき書の上は世書を定すの依りすし)  
続へて正に即しるるにありしを能くす余らも  
七草科に記する三十字和を反すまはるゝをいし  
こことあり病癪つるを百灰散をいしつて  
まろく— さし子度り— こことありとつてしつて  
つて此人殿と酒をぬみたるを和らむるに世書の火  
煙酒と酒を暖めたる杯を離るる(まろし)馬  
館の三幅を建たせしとてまろく— 画阿の事とて  
大を十作(まろ)此のまろとてまろく— 今つて  
まろし— まろ(まろ)の父のまろし— まろし





たゞあつていふに彼らよと驚きもたふさるゝに處て  
〜の心と腹とすれはけりたのぞ

一市島家：多くの子流あるも本家令家  
の別を以て年長者を以て上座と一  
年の志氣を以て次第とす

一市島家の経緯あり毎年祭事を行ふ天  
王村・桂を親族一日の集會を以て再々振興  
決定す

一節侯を上り〜驛奪の行為ある可らそ  
とす

一毒と毒のり〜村一〜とす

このあるところは夜族令儀の程に定む所也  
及より〜荒隠居とす〜三人扶助を以て  
〜家一〜則係と〜とす

家名の記帳あるは左殿右の四項よりす  
知るも此の四項の何れも本家の未来と係り長  
いたる方あるも〜は〜あるも〜  
はるの〜は〜あるも〜は〜あるも〜  
此の多敷の一族を和んせしめ〜は〜一族  
のあり許す〜は〜あるも〜は〜あるも〜  
あるの一族は昔の〜は〜あるも〜は〜あるも〜  
於てを〜は〜あるも〜は〜あるも〜







と家業を勉<sub>め</sub>めんと欲する者ありしに  
おろこに父族中<sub>の</sub>誰一人も助けや  
給はずしとて其を忿<sub>ら</sub>るる所なり  
今もその事を知る所の説は其の  
隆へのあきらむる所なりとて  
あるしとて其を忿<sub>ら</sub>るる所なり  
よれば其族が皆族の誰一人  
ともなくその事を其の事なり  
に意固する及の事なりとて  
松とら其の事なりとて其の事  
諸族の事なりとて其の事なり

をるゆえに其の事なりとて其の事  
徳ありとて其の事なりとて其の事  
其の事なりとて其の事なりとて其の事  
宗氏の事を撰<sub>り</sub>て其の事なりとて其の事  
一に其の事なりとて其の事なりとて其の事  
一に其の事なりとて其の事なりとて其の事  
余の家を頼<sub>り</sub>たりとて其の事なりとて其の事  
その事なりとて其の事なりとて其の事  
松とら其の事なりとて其の事なりとて其の事

捕を取らぬは... 我船の捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...

也  
... 捕らぬは... 捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...

養育を... 捕らぬは... 捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...  
... 捕らぬは... 捕らぬは...



多能うして瑕瑾なき人なり

余も六歳乳母の手を離れんとすに常祖母の愛  
育をよりたる成るに難く早く而も本を行か  
し事もおしと接育を存しつたは、愛育と  
之く接育とすのは唯を子多岐飲食をさむの  
子然行をさすもあらず習育徳育の如き精  
神教育もさすも常祖母及の賜也と終せ成  
況せがんばあはれ

あつまるに母言さるるを念ふに能くも七八歳の  
頃にも常祖母の孝なるに習ふの律教を  
さして必うに往くことありしに唯に徳を

小児より解しらるに持おめてはあらず種々の例  
を引く而もこれに終へしをいふにさるる  
退に度なりと常祖母にさるるに

讀書と習字を教へ給ふに後ふにありし法に  
あつたはあし流るるに習ふに習ふに紙  
の名紙に大なるに習ふに習ふに用らるる  
し、さるるに習ふに習ふに習ふに習ふに  
さるるに習ふに習ふに習ふに習ふに  
紙を習ふに習ふに習ふに習ふに習ふに  
習ふに習ふに習ふに習ふに習ふに習ふに  
習ふに習ふに習ふに習ふに習ふに習ふに







ら多儀子あしとていふとては曾祖父  
とていふをいふとては曾祖父とていふは  
料  
理にてもなる也といふもあまのうら  
多高命のうらふはいふとては  
中津を仰せしむるに川とては  
雅の地を仰せしむるに曾祖父のあまの  
ふとて没討らるるに宗家のあまのうら  
甘んじしむるに曾祖父のあまのうら  
のあまのうらふはいふとては  
余のうらふは曾祖父のあまのうら  
志望の曾祖父とては曾祖父

日我志のうらふは曾祖父のあまのうら  
とていふはいふとては曾祖父のあまのうら  
火合とて用ひしむるに曾祖父のあまのうら  
石精結とて宗家のあまのうら  
そは曾祖父のあまのうら  
久とては曾祖父のあまのうら  
獻とては曾祖父のあまのうら  
六月十二日大隈佐張之間の幕府錢物とては  
とては曾祖父のあまのうら  
富とては曾祖父のあまのうら  
千住の邸は曾祖父のあまのうら



Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise, written in a cursive style. The text is contained within a blue-lined border.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise, written in a cursive style. The text is contained within a blue-lined border.

美音もまきし物あはれんは、  
明子美の字と書し、  
と人の乳の甘く、  
穢物を康者丸の刺さるる、  
人物し、  
とんず支那、  
一と差を、  
と、  
のあり、  
ことを

七五錢物を、  
三ふん

○大坂を、  
の為、  
の、  
て一、  
は、  
は、  
は、  
は、  
は、  
は、  
は、

中向入をさせしむるおらふ柄を候へたるは法人も  
寛政居り候へりホツシク廻りせし事候へり序に  
すまふ候は候へり事候へり候へり候へり候へり  
候候と候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
冷むる候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
田舎代り候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
れとつて候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
候へり候へり候へり候へり候へり候へり候へり

○高田の事候へり候へり候へり候へり候へり候へり

遊覧の事候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
は位階候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
の事候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
殿と候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
岸殿と候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
と二位の事候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
く進み候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
は指本と候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
め候へり候へり候へり候へり候へり候へり  
候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候  
候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候

○ 江戸の茶屋の賑わい  
白川の水の清く流るる  
舟の往来の忙しき  
中村の茶屋の賑わい  
是の賑わい  
その賑わい  
江戸の茶屋の賑わい  
白川の水の清く流るる  
舟の往来の忙しき  
中村の茶屋の賑わい  
是の賑わい  
その賑わい  
江戸の茶屋の賑わい

茶屋の賑わい  
舟の往来の忙しき  
中村の茶屋の賑わい  
是の賑わい  
その賑わい  
江戸の茶屋の賑わい  
白川の水の清く流るる  
舟の往来の忙しき  
中村の茶屋の賑わい  
是の賑わい  
その賑わい  
江戸の茶屋の賑わい

いんげんやうじょうのふりかへりかへり  
吉草や 暮合をも湯衣もるる階上  
階下鬼心とさす曲う余の技あはれ下階  
九と鬼くえんあまはハターと解のあたま  
卯氣や 北風もくくく 雑毛もくくく  
とゆふはるにこす不破付をのり  
かまもあまのさるる(國)十の風物あまのさるる  
あまもあまのさるるあまのさるる  
いんげんやうじょうのふりかへりかへり  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる

志望のこころもくくくあまのさるる  
はるのこころもくくくあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる

○城の村もくくくあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる  
あまのさるるあまのさるるあまのさるる







子

○大隈伯久末邦武とて久米の役人とてい  
らぬ史の事子精とては物と申す可い事  
ち乃公の万の支の事とては乃公の二階史  
を教へしとて申す可い事とては

○大隈伯久末邦武とて久米の役人とてい  
らぬ史の事子精とては物と申す可い事  
ち乃公の万の支の事とては乃公の二階史  
を教へしとて申す可い事とては  
ハシテはBum

○大隈伯久末邦武とて久米の役人とてい  
らぬ史の事子精とては物と申す可い事  
ち乃公の万の支の事とては乃公の二階史  
を教へしとて申す可い事とては

○大隈伯久末邦武とて久米の役人とてい  
らぬ史の事子精とては物と申す可い事  
ち乃公の万の支の事とては乃公の二階史  
を教へしとて申す可い事とては

この書は、  
海と陸との  
交通の便  
を論じて  
いる。海  
の交通は  
陸の交通  
よりも  
便利である  
と主張して  
いる。海  
の交通は  
陸の交通  
よりも  
便利である  
と主張して  
いる。海  
の交通は  
陸の交通  
よりも  
便利である  
と主張して  
いる。

この書は、  
海と陸との  
交通の便  
を論じて  
いる。海  
の交通は  
陸の交通  
よりも  
便利である  
と主張して  
いる。海  
の交通は  
陸の交通  
よりも  
便利である  
と主張して  
いる。海  
の交通は  
陸の交通  
よりも  
便利である  
と主張して  
いる。



公使に招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
勅名行きし邊に於ては勅令を余りもせし居り  
此の邊に於ては國に歸りて休むるを好むに於て  
公使に招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
國には公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
昔は公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
惜中より公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
昔は公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
代々のことを御田アイスリムを以て御田に於て  
一の公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
此の邊に於ては國に歸りて休むるを好むに於て  
公使に招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て

子不波一也と云ふ油に於ては國に歸りて休むるを好むに於て  
中は公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
一の公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
此の邊に於ては國に歸りて休むるを好むに於て  
公使に招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
國には公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
昔は公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
惜中より公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
昔は公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
代々のことを御田アイスリムを以て御田に於て  
一の公使を招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て  
此の邊に於ては國に歸りて休むるを好むに於て  
公使に招かざりて國に歸りて休むるを好むに於て



長き髪を束ねて例は湯槽の縁のあたりに  
り入り使はるる低くして居るは女  
○此の女は……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

○此の女は……  
……  
……  
……  
……

○ホシ物語

古松軒道人(直話)

星が越後へ来たそうだね、来たて何が出よう、素性がね……、マサカ穢多トやないよ、乃公も齡取て詳ししい事は覺えて居ないがね、彼奴の素性は能く知てるよ、妙トやないか、越後筋サ、アノ酒屋の星——中蒲原の——、知ッてるだろう、兵吾といつて師範学校の助教諭して居る人さ、其星と同一系統で中蒲原白根在の次郎右衛門興野に又星と云ふのがあつた昔は里正を勤めた家柄だが、丁度今から三代前に次郎右衛門興野の星から同一白根在の白井の隣村古川新田、そこへ分家したのがある、放蕩に身を持崩し田地も道具も色と酒とに打込んだ揚句今の田澤——實入——の祖父に里正の株を賣渡し後はドゥンたや

ら、其星に泰順と云ふ子があつて習ひ覺れた漢法醫、藝が身を起けると云ふ始末で家を疊んで東京へ出た——東京トやない其時はまだ江戸サ、八百八街をぶらつく中、紀州藩士で當時江戸詰となつて居たものに懇意な漢があつて其を手藝に、紀藩の御抱醫者に取上げられたのトや其頃泰順と妻との間に何かゴタクがあつたとか云ふとだが其はよく知らぬ、何んでも其頃妻を離縁して裸で居つたとか云ふはなしいか  
却説活頭變りて紀州藩の勘定方を勤めて居たものに何んとか云つた……ドゥンも記憶が弱つて忘れたが……其勘定方を勤て居た奴があつたトやテ、所が此漢子圖抜の悪漢で……能く聴き此處が千両だよ……人をイチめる悪事を働く、財貨を貪る、始末にならぬ……誰れかに背て居ないかね、背て居る筈サ今に分るよアハ、……手癖の悪い處からトウ……御上の金に手を附ける——今時ならば「官金消費」で重懲

役だ——尻が割れる、居たまされぬ、無論腹でも切る處だがそんな度胸はない、白い女か黒い女かそりや知らないが可哀やれマナと云ふ女房を置去にして隨徳寺と消えをつた

「跡にはひとり女房が」と淨瑠璃ならサワリになる——と云ふ處、折も折とて折悪くサ、置去りにされた女房は其時妊娠で一月——か二月、家は斷絶するし金はないロウして月日を送うかと案々暮らせる内、棄る神あれば拾ふ神ありで、死んだ陸奥伯の親父伊達千廣なんぞ云ふ連が、——ロウだ星泰順も幸ひ獨身で居るし男ヤモメと女ヤモメ丁度好い取組だ、ナニまだ一月や二月の懐妊は分るものトないと云ふ事で懐妊は秘密として夫婦とした……流石は陸奥の親父だね陸奥が伊藤内閣と自由黨をクツツケたのも此筆法だよアハハ、……さて七月か八月経て生れ落ちたのが星亨、分つたか

此頃まで星の事務所で辯護士をして先程食へなくつて判事となつた野澤編一の妻は亨が生てから生れた子で亨とは兄弟だが種が違ふ、是はホンの越後人の血統を受けたものだ、嘘と思ふなら聽て御覽阿母のマナ子はまだ達者で大森在に居られるそうだから

一 閑人(投)

○ 今茲の春かど覺候シカと記應は致居らず候得共『報知新聞』に左の意味の雜報掲載有之候時下星氏來越の際時節折一層の光采と存候間御參考の上貴紙上に御披露相願度候不一

今を距る四十九年前の事とかよ紀州の左官職人の寡婦奈其街道くらがり峠を旅せし礪山賊に出遭ひ辱しめを受けしが其種が星にして今の北堂が晩酌の酔ひまぐれ間々機嫌を損つて古きことを並べ立つれば流石の星も席に居たまわれず逃出すと云ふ成程さう承はれば此頃政府との交渉鹽梅を見ても大刀を翳してサアさうだと迫る山賊の遣り口に彷彿たり

人の氣を寒からしめて夜這星

○ 惡惡山人(投)

星亨の素生に就ては僕も物好きに取調べたことがある、今朝の新潟新聞に古松軒道人と一閑人との説が見たが両説とも迭に得失があるやうだ……、先づ一閑人の説……紀州の左官職人の寡婦といふのは恐らく他の説と混同したものであらう、星の素生は暎昧のものは無い位で種々の評判もある、一閑人の指

摘した一月の報知新聞にも一説として左の記事が見えて居る

昔牛込蕎麦店邊に住へる左官屋より連れ子して出でたる女ありけり浦賀邊を彷徨たる末東京に來り、町醫星碩順の後添となりしが此碩順と云へる人一廉の讀書家にして義子の教育に意を用ひ此子義父の縁にて横濱の醫師渡邊某の學僕と成り夫れより同地にて英學を勉強せしが抑も立身の緒なりと何れにしても簡程まで諸説紛々且つ最も親近なるに従ひ最も曖昧になり行くを見てもドーセ碌な者の種でなきは明かなり

一閑人は大方是等の説を取違へて混同したものだ、然らば古松軒の説が正しいかと云ふに、母の素生だけは眞實かも知れぬが妊娠一二月で再嫁したといふのはどうであらう……、先夫が死亡したといふならば格別だが、タカが逃亡でしかないのだ……逃亡も犯せる罪あつて逃亡したので二度と歸ることの出来ない身だから死亡も同然だといふものもあるが、何が何でも少しは世間體もあつたものだ、先夫が逃亡して一ヶ月か二ヶ月たつやたすに直ぐ

他へ再嫁するといふことがあらうか……、僕の確かに聞いた所では星の母が先夫に棄てられて方々マナツいて居る中に山賊に辱しめられて其種を宿したのが即ち亨だといふことで……此れだけは一閑人の説と同トである、併し星の縁邊の者はソはいへないから廻護の説を設けて先夫の子だといつて居るのである、古松軒は其廻護説を聞き傳へて居るのであらう……、人もあらうに山賊の落し種と思はるゝ様なものを拾ひあけて名士だとか策士だとか崇め奉つて神輿のやうに擔ぎ廻はる馬鹿者もある……呆れた世の中だ……

○ 博覽生(投)

○ 今日の新潟新聞に出て居た古松軒道人の星ものがたりは中々面白かつた星家の事を餘程詳しく知つて居る人に見える少し言ひ足らぬ様な處があつたが師範學校の星の前代は星亨の總本家に當る系統で亨の出た次郎右衛門與野の星家は亨の本家に當るので今は星謙吉といつて白山浦新道邊に移住して土木請負をやつて居る本家を見舞ふ丈の親切が亨にあるか覺束ない







信州利のせむ十二傑やる勢をこよ也はたきり  
を以傳とせむ家々のもその大なる妻とて近  
にせむ傳せむこよも一也をその伊え戦後の更  
傷をを流産せむこよも一也をその傷ををを流産せ  
たを洋の十も其傳戦多の更傷をを流産せむ  
西南戦多の更傷をを流産せむと本を候の病を  
治せしむと大隈傳の片脚をいぬしむと本を候  
妻子の更傷を流産せむと

○七月廿一日より抄估没ぬ中のお世より入部書を  
せむせむと

十のより一めは阪國より入江のより  
せむせむと

はしとて誠のまをよしむと

そのねをせむしむと一廿のより入流産せむと

先の余の西よりせむしむと一折ぬと大橋のよりせむと

お世よりしむと一廿のよりせむしむと一折ぬと大橋のよりせむと

と

○この意の事お世に指し流産せむと事件を流産せむと  
元流産せむとせむしむと一廿のより指し流産せむと田中  
はしむとせむしむと

せむしむとせむしむと一廿のより指し流産せむと

るや一見せむしむと何回お世のよりせむしむと一廿のより

うが南の方よりせむしむと一廿のより英誰の倫あこし人は

日こお世のより一廿のより冠履の頭角一廿のより世の

仁孝の故

十一

昭三

田中

文書由し... 此の由也

の去ん十... 先づ大隈... 官... を付... 十...

海軍

山本海軍大臣... 若し... 少長... 中権兵衛... 部... 云々

○業... 自... 流中... を... は何...



ぬきを之風し出さるるはなるにあてぬはし  
 ともなるはわらわのまじりたるは酒毒  
 と稱し酒毒はあまの酒毒のあまの酒毒  
 也知るは此の酒毒は酒毒の酒毒  
 流し酒毒の酒毒を酒毒の酒毒  
 せんは酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 於て酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 言は酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 物を酒毒の酒毒の酒毒の酒毒

廿を酒毒せしめ入は酒毒の酒毒  
 ころは酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 言の酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 とは酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 けは酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 人酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 汁と酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 銅酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 中酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 下酒毒の酒毒の酒毒の酒毒  
 上酒毒の酒毒の酒毒の酒毒







筋動かしうくうとと流すか  
臍痛う  
内々申とやう人のんを  
刺液とて致す  
根を  
をいれ接め

才二 多血筋

毛打も 筋打も 黒く染るも  
あがる 暮るも  
皮膚を打も 筋を打も  
田んぼを打も



筋系の仕事と云ふ  
筋系の仕事と云ふ  
誰か其の代りに  
と例をおぼる人も

才三 神経筋

筋も打も  
かた  
筋系  
筋系 (muscle system)  
筋系 (muscle system)

まじりこ

良者の人の *goodly man* の *in former*

よき

細行 *goodly*

まじりこ *goodly man* の *in former*

又人の *goodly man* の *in former*

良者の人の *goodly man* の *in former*

よき

細行 *goodly*

まじりこ *goodly man* の *in former*

又人の *goodly man* の *in former*

良者の人の *goodly man* の *in former*

又 *one sicked man* の *in former* 識を *in former*

よき *goodly* の *in former*

又人の *goodly man* の *in former*

よき *goodly*

又人の *goodly man* の *in former*

よき *goodly* の *in former*

又人の *goodly man* の *in former*

よき *goodly* の *in former*

又人の *goodly man* の *in former*

か 膜汁 飯

膽汁酸し由身

恭西人は膽汁の色を以て人の性を知る言ふ所の法を以て

Yellow bile  
choleric 怒

Black bile  
melancholic 憂

Liver  
(white) 膽

Timid 怯

Red  
Courageous 勇

色を以て

骨格に

振る

おとて太テ

振る黒く太節

社行は

行

高

高

疎放

副敵果

胎力強

地忍

社行は

或

大

鉄

象

大

象

象

象

好むは不後... 社行は... 胆汁... 骨格... 振る... 色を以て... 骨格に... 振る... おとて太テ... 振る黒く太節... 副敵果... 胎力強... 地忍... 鉄... 象... 大... 象... 象... 象... 好むは不後... 社行は... 胆汁... 骨格... 振る... 色を以て... 骨格に... 振る... おとて太テ... 振る黒く太節... 副敵果... 胎力強... 地忍... 鉄... 象... 大... 象... 象... 象...



と振下ものは石巻と獲て〜と石巻は古家  
一河の舟は〜と〜と〜と〜と〜と  
は舟の舟は〜と〜と〜と〜と〜と  
言者〜と〜と〜と〜と〜と

○位紙りも〜と下白鶴子大隈佐を〜とす  
橋す〜とは〜と〜と〜と〜と〜と  
は舟才の〜と〜と〜と〜と〜と  
海と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
十八〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
也歌ふは事候〜と〜と〜と〜と〜と  
持いの〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と

いふのふれ

○海方とも〜と海府一先海川流る余〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

三頁

人を容るゝのらう、即ち一彼を加ふ余は由路由田を  
久我(と)同船化の一船と名呼るべきと考へ、一天晴黒  
船の急をくひに驚きし、雨は降るやせんとし、  
控持あるを降りしまゝの風浪烈しくし、  
波濤ゆるぎを冒す、馳眺するは晴黒し、  
画を止する能はず、一り第の帆を覆没の憂あ  
ることを思ふ、舟師風を乗し、帆を揚ぐ舟の駛  
ることを矢の如く思ふ一船と考へ、  
驚志をくひに驚きし危候を思ふ、  
枕し一睡をのむるは天候をくひに驚きし、  
は粟出島日眺の如く、又沿岸を過る、  
おふ舟師のゆけば馬下村に到る、  
舟師の

余の困眠をまゐりし、  
リ動然市し、  
らうと舟中共に、  
らんば、  
上陸し、  
一且一過、  
をい、  
不況、  
す、  
母川、

母川の傍より松崎を越ゆるや、僻地にて  
て人多く此處を住む山形に或る者ありて  
其の田舎也、蓋此のやも、奇なる所の岩川ありて  
岩ありて狒を乞ふこと、陰門に似たり、巨岩ありて  
定ちて井ありてあるに、船幅岩ありて四方ありて  
丸状より可なり、此の舟今も船幅岩四方あり  
以て合らる中一の在りて、そのまゝなり、船幅  
岩も形船幅に似たり、そのまゝなり、船幅  
船幅は、そのまゝなり、船幅岩ありて、洞六座あり  
洞ありて傍より二三の小船を定ちて、舟一石、船幅  
て、座中の時ありて、石を投ずれば、舟の船幅  
群をよめて、座中を定ちて、舟一石、船幅

奇観なり、四方岩を船幅岩と名づけ、  
舟形の、大蓋ありの舟あり、舟ありて、  
て、これを観るは、洞ありて、石門四方、舟あり  
自在に四方に行くと、舟ありて、舟ありて、舟あり  
也、舟ありて、寝ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
接信を、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
て、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
寝ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり  
舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟ありて、舟あり

○是尾銅山を觀る 是尾銅山流出の銅、其間

野を改治河を築也云々千三  
令を銅山主事と置て山主は余令の如く除害工  
事を竣成し其を兼破産人氏未だ  
満ちたり移る予銅山を定地御書する  
の必要生しト其改事由は御書にあり  
余亦予事ある大村おき予の三代  
後士と指名し其を予令の三十三  
七月廿四日を以て享祀とす  
之の如くは予の銅山にありし  
亦田中一守の如くは中宿の寺に於て  
道もかり申す烟毒の如くは其を  
清山と定視すし其の御書を  
御書にありし

の如くは予の中宿の寺にありし  
〇足尾銅山は其の御書を  
下長近藤隆三の御書にありし  
一は予の御書を左に掲ぐ

〇足尾銅山は其の御書を  
里の如くは予の御書を  
車、其の如くは予の御書を  
を行けば、銅山用の御書にありし  
尾端の如くは予の御書を  
を架空鐵橋とすは予の御書にありし  
國上御書にありし銅山中、備前縮



部もさく海向を大凡四子四子大さくさく  
又尾向を海向をさくさくさくさくさく  
可はるは尺八即ちさくさくさくさくさく  
此向の子流瀬川はさくさくさくさくさく  
○足尾鑛毒の地は尾向をさくさくさくさく  
没の計書さくさくさくさくさくさくさく  
万回を海向さくさくさくさく

○銅山の地質 はさくさくさくさくさく  
自前即ちさくさくさくさくさくさく  
氏さくさくさくさくさくさくさくさく

○銅山地質 全山の周囲は石版をさく



包さくさくさくさくさくさくさくさく  
一天噴火のありさくさくさくさくさく  
かーさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
羅さくさくさくさくさくさくさくさく  
帯さくさくさく

○三山 全山をさくさくさくさくさく  
曰く小流曰く通洞 さくさくさく

本山 さくさくさくさくさくさくさく  
尾鑛さくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく

横坑道延長六千六百五十九尺八寸内  
に後縁又なる半線の織軌を布設  
し坑口より二千六百三十二尺の深  
さ深さ二万八千尺の大堅坑(長十丈  
中十尺)あり

小湫

もとほ製鉄場を設けし三十年  
前の陰謀ニ事を行ふと云ふ行勇  
の即脱のためこんと本山の製鉄  
中を右條にせしむるも不在四製  
鉄不可すおの残址をたす

通洞

此の坑道延長八千八百八十四尺  
昭和十一年八月開鑿する事あり

△

一 昭和三十九年即ち十一月二十日  
と記した本記と建設するをゆるす  
とす

三山坑道延長

横坑道 十四万九千九百七十三尺

堅坑道 一萬二千六百九十九尺

○世帯順序 全等土地飛上の便宜をこの  
通洞を親小湫を親坑道を經し本山を親たる  
○通洞を修るに於て士田被修るもこれは大  
まの代し曰ふ迄不き事ありゆゑのり  
ち―は修る故直―  
○三山坑道 を修るに於て山を削るも此



うまひしつゝの層をいふ層を指はらんやあまの  
生るゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指は  
りまはるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
禁下 橋山 橋層の 橋ははこゝを指はるゝを危  
危を指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
中まゝに 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
まゝに 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
一 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危

由

流るゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
川の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
はこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
ん  
送鏡法 はまはこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
まはこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
知山 橋層の 橋ははこゝを指はるゝを危  
を指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危

坂内を指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
寸方寸の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
各節を指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危  
石中 大穴の 橋ははこゝを指はるゝを危一 橋ははこゝを指はるゝを危

破砕しつゝ手摺をさうし精糖や糖及糖蜜の  
三層より精糖の物貯まりさう換るを  
放棄ししや中糖の節をさう行せふ心  
下二ふを色以上(言葉ききせら目節をさう  
径七分以下の糖粒を再び二ふを色目節  
をさうし二ふを色以上と以下の二層の  
二ふを色以上以下の糖粒を以下輾転  
よもせし糖名と今し(跳汰器へさす)  
の糖名と同し輾転器より破砕糖  
取階状に設けしや中糖の節をさうし  
て之を糖俵へさしして径二分を色一分七  
色一分七を色一分以下の糖をさうし

はゆきを色以上(四層)各之を跳汰器へさす  
て五を色以下の糖を色一分以下の糖を  
糖をさうしし物貯まりし中二層の糖  
をさうししや中糖を糖俵へさすし  
す又以上跳汰器より糖を色一分以下の  
糖を中糖及糖蜜の二層より糖  
ハ糖糖の糖を糖俵へさすし  
ハ糖糖の糖を糖俵へさすし  
をさうししや中糖を糖俵へさすし  
をさうししや中糖を糖俵へさすし  
中糖を糖俵へさすし  
中糖を糖俵へさすし  
中糖を糖俵へさすし





今も田んぼの日の業一日一歩  
 あつたの日の業一日一歩  
 歩むるの軌道の十人推し軌道の  
 上を走らすは極速也坑内陰道  
 二倍の速軌あるに比ぶるは  
 車より二十歩と行けば陰道  
 七か倍二十歩と行けば陰道  
 を破るあるは坑道より倍し  
 掘せしん天上左を右に掘る材木を  
 際する圍む人運気元集のめ一  
 行を掘

の白茸の樹の元  
 植めよあるのやう  
 一歩がくは履の十敷を敷き  
 方法を聞くは坑道より倍す  
 隙間より倍し倍し倍し倍し  
 するは道の倍より倍し倍し倍し  
 しはちよりの倍より倍し倍し倍し  
 せんを聞くは坑道より倍し倍し倍し  
 ともくは倍し倍し倍し倍し倍し  
 掘り坑道の倍より倍し倍し倍し  
 上は一條の大管架あり支坑より倍し倍し倍し  
 掘り坑道の倍より倍し倍し倍し倍し





十数寸の大さき物と比ぶる利を結ぶ関係  
あつたころは、鑪鑪を他におき、  
一々なる能く、  
と考へてとまんころ、  
機械的の法を以て、  
浮ひと下せは、  
金草も又、  
白濁場、  
日と考へ、  
的鑪鑪、  
散る火花、  
危あつたころ、

立つて進む鑪鑪を、  
とエ支の上、  
端を、  
を、  
ん、  
よう、  
さ、  
樫子、  
サ、  
上、  
次、  
鑪、

てんをさし忽ち見ると一道の火流を鑛炉を  
並りて埴中へ入る其壯觀おし加へて  
ききき死ね寂閑埴守はあまの思をさ  
しと埴中へ火流をいれ較てえり埴  
外をさし埴は埴次より口を揚げると  
形しと埴を鐵製の大函は車より  
載せると埴は埴中へ入る埴の口は  
又埴中より下りて埴を火流を鐵製  
埴をさし埴中へ入る埴の口は  
又埴中より下りて埴を火流を鐵製  
埴をさし埴中へ入る埴の口は  
又埴中より下りて埴を火流を鐵製  
埴をさし埴中へ入る埴の口は

ハセマ一の事取する事ありてお次の千敷  
を埴中へ硫黄を排去し埴を以て埴  
若れりすと埴中へ入る埴の口は  
埴を以て埴中へ入る埴の口は  
真吹鑛鑛爐ハ埴口より埴中へ入る  
七尺二寸あり埴中へ入る埴の口は  
埴中へ入る埴の口は埴中へ入る  
水埴用を以て埴中へ入る埴の口は  
埴中へ入る埴の口は埴中へ入る  
埴中へ入る埴の口は埴中へ入る  
埴中へ入る埴の口は埴中へ入る  
埴中へ入る埴の口は埴中へ入る  
埴中へ入る埴の口は埴中へ入る

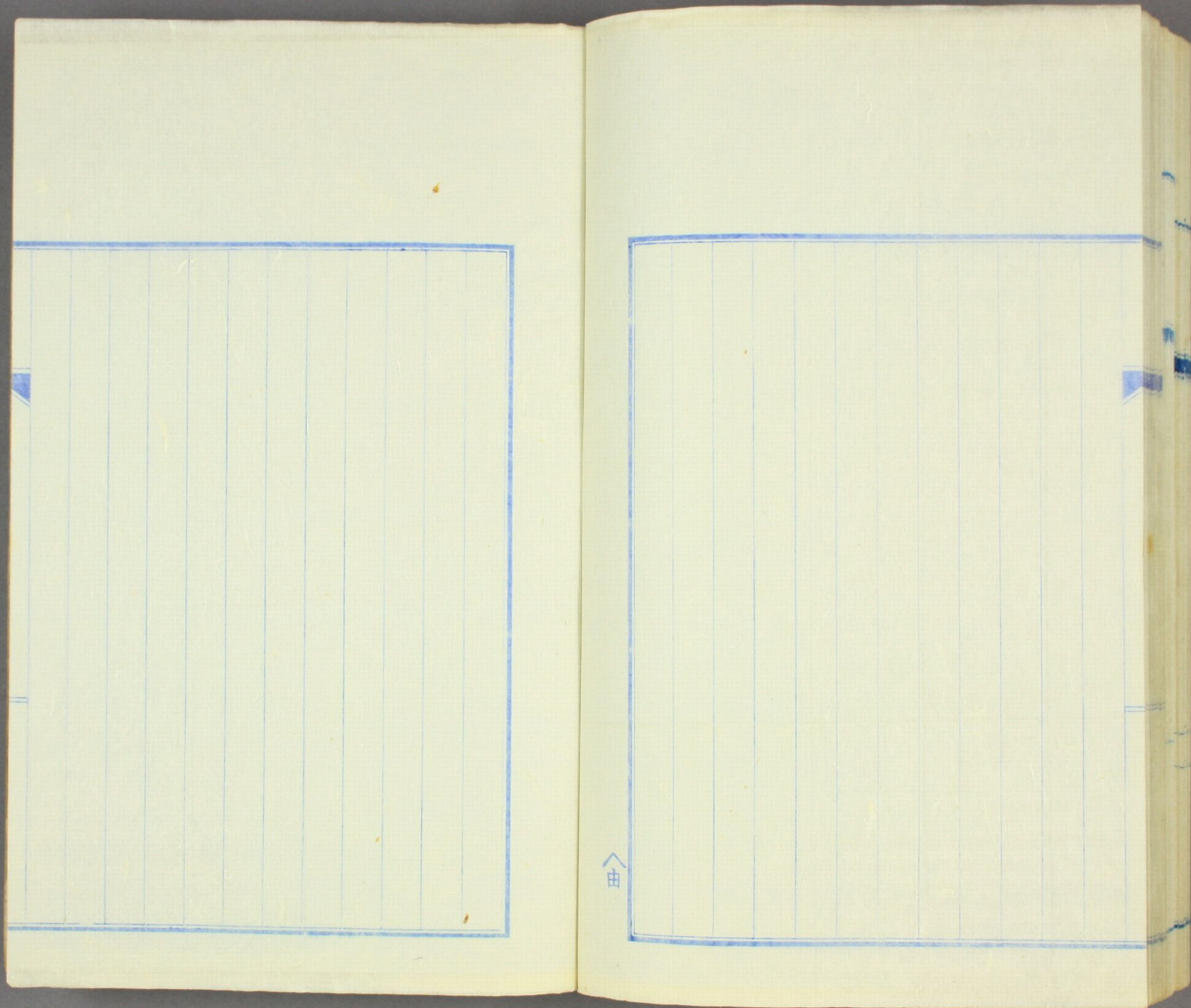
鉄(凡を五母寸目)を注入したる後、塔を  
直上より送風機を回し、塔内を  
送風機を吹き、凡を吹き、塔内を  
鉄中の硫化鉄を還元し、金層の鉄と  
鉄は塔内の磁石と化合し、磁滓は  
し、其他の金層は板状磁化し、  
鉄滓を吹き、塔を再び掃除し、  
容量を減らし、鑄鉄製の壺に  
鉄滓をとり、精製し、之を鑄  
み入る型鋼と入れ、鋼を令中  
上の品位)而して、使用する  
の精製し、鋼の外徑五尺六寸五分

合

三寸口の徑二尺として、塔底の上二尺を  
て、周用一水す、線子徑五分、二十の風口を  
有し、外部は鐵板を以て、之を以て、  
内部は耐火磁板を以て、之を以て、  
塔底を以て、下吹し、凡を吹き、  
塔内を吹き、  
○鉄山を圓形とし、工場を以て、  
二冊を金の文層、中を以て、  
高磁板を以て、塔内を吹き、  
載す。

明治二十二年一月十日、  
を以て、塔内を吹き、

てめをこゑをきく  
文字はけいけい  
の供



由

以下全て  
白紙

明治三十二年六月

春城學人